

On the leading part of Noh Play Daraniochiba

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5262

〈陀羅尼落葉〉のシテ

西村 聡

能〈陀羅尼落葉〉のシテは誰か。

シテを演ずる役者の名を問うのではない。彼が演ずる人物の名を問うのである。

ほかの誰でもない、登場人物中の主役、主人公を対象として、このような問いが、はたして意味を持つのであろうか。常識的には、他ジャンルではまず成り立たない問いであろうし、能の他の作品についても、同様に、それは自明のことのように思われる。もちろん、複数の有力な登場人物のいずれを主役、主人公とみなすかによって、その作品の主題や構想が微妙に変化して把握されるということは、それこそが物語や小説の、作品論の重要な課題として、しばしば議論されている。しかし、ここで問題にするのは、そうした解釈の揺れでない。

夢幻能の舞台は、すべてがシテを中心に構成される。しかも、多くの場合、シテ自らが正体を明かす詞章を持つ。ところが、その名のりの表現が、文飾に流れて意味のあいまいなとき、あるいは固有名詞を示すにもかかわらず、その実体が現代の通念に相違すると、作者の意図（もしくは成立時の観客の理解）が正しく伝わらないことがある。

〈大社〉のシテ、「出雲の国大社」の祭神は、通説（オオクニヌシ）とは異なり、当時はスサノヲと信じられていた（拙

稿「大社のシテ」へ『国語と国文学』六四ノ一〇、一九八七年一〇月。また、〈葵上〉のシテは、六条御息所の「生霊」と呼ぶのは不正確で、死霊の像を色濃く宿した「怨霊」であつた（拙稿「『葵上』における死霊のイメージ―火車に乗つた六条御息所―」『説話・物語論集』一〇、一九八二年五月）。これらは、現代観客の誤解する後者の例である。

ひるがえって前者は、挙例がそう容易とも思えないが、演能・研究の機会が少ない番外曲などの中には、再検討を要する作品が、まれにはなく混在しているのかもしれない。ここに取り上げる〈陀羅尼落葉〉もその一つであり、シテは通説の疑われない雲井雁（の亡霊）と見て誤りにならないのか。通説に先行する江戸後期の注釈書、『謡言粗志』の異見を対置させて、落葉宮説復権の可能性を探ってみたい。

二

〈陀羅尼落葉〉のシテに関する明治以後の所説には、管見の範囲で、次のようなものが知られる。

- ア、大和田建樹『謡曲評釈』第三輯（博文館、一九〇七年二月刊）……雲井雁
- イ、芳賀・佐佐木『校注謡曲叢書』第一卷（博文館、一九一四年四月刊）……雲井雁
- ウ、丸岡桂『古今謡曲解題』（観世流改訂本刊行会、一九一九年刊）……雲井の雁の亡霊
- エ、長連恆『校注日本文学大系』第二十卷〈謡曲〉（国民図書、一九二六年七月刊）……雲井雁
- オ、野々村戒三『謡曲三百五十番集』（日本名著全集刊行会、一九二八年五月刊）……落葉宮の霊
- カ、野上豊一郎『解注謡曲全集』第三卷（中央公論社、一九五〇年二月刊）〈落葉〉解題……雲井雁
- キ、『日本国語大辞典』第十三卷（小学館、一九七五年一月刊）……雲井の雁の亡霊
- ク、『日本古典文学大辞典』第一卷（岩波書店、一九八三年一〇月刊）〈落葉〉項……雲居雁
- ケ、西野・羽田『能・狂言事典』（平凡社、一九八七年六月刊）……雲井雁の霊

オの落葉宮説を除いて、すべてが雲井雁をシテと認定し、これがほぼ定説化している状況がうかがわれる。そして

主題に言及するもの（ア・イ・ウ・カ・キ・ケ）のまたすべてが、彼女の嫉妬を扱うとする。ただし、そうはいつでも、落葉宮説のオも含めて、シテ認定の根拠を具体的に示すものはア一つにすぎず、自覚の有無は不明ながら、他はこれを了解、踏襲する結果となった。おそらく異説オの存在もほとんど意識されることなく、「常識」が無批判に継承されたのではないか。

その「常識」は、やはり中入り直前の、シテ自らの正体明かしをよりどころに形成されたと想像できる。

シテ此うへはわが名をいはん夕霧の、地まよひをはらしおはしませと、我もねになく雲井の、かりがねさむみ吹風の、さそふとばかり失にけり、

（本文の引用は鴻山文庫蔵日爪忠兵衛宗政手沢本により、以下、必要に応じ、諸本との異同を掲げる）

夢幻能の常として、ここにシテの名が表明されたと考えるのは不自然でなく、何より「わが名」を言おうといったうえで、「我もねになく雲井の、かり」と続けるからには、

ア、雲井の雁のほかに名乗りたるなり。

ケ、自分が雲井雁の霊であると言ひさして消える。

などと、その「我」に雲井雁を重ねることは、むしろ素直な読みかもしれない。とすれば、シテ自らの名のり以上に優先すべき根拠があるうはずもなく、シテⅡ雲井雁説は動かしがたくなるが、この一節には、そういう単純な構造しか読みとれないであろうか。その点は後述することとし、ここでは、仮にシテが雲井雁であるなら、詞章の読解にどのような無理が生ずるかを、アの見解に例を求めながら、整理しておきたい（イ以下は、注のないもの、あってもきわめて簡略なもの、解題・辞典類、のいずれかであるから、解釈にまで踏み込まず、従ってあまり参考にならない）。

(1)、然れども死後猶雲井の雁の執心。落葉の宮の許に残り居て。浮ばれざりし事を作れり。夕霧の始めて宮に逢ひしは。宮の小野に住み給ひし頃の事なれば。その執心の小野には行きたるなるべし。

（イ、雲井雁の嫉妬心なほ小野の落葉宮の許に残りし事を作れり。）

（ウ、夕霧の大将の北の方雲井の雁の妬心永く小野に残り居て、其靈魂旅僧に昔語をなす。）

《陀羅尼落葉》のシテ出現の場所は、小野にある落葉宮の旧居である。そう述べるシテが、生前この地を訪れたことのない雲井雁だとすると、その執心がたんなる夕霧への愛執ならば、二人が暮らした三条宮あたりに出沒するのが自然であろう。逆に、落葉宮の旧居には、類曲《落葉》のごとく、落葉宮自身が現れてふしぎでない。にもかかわらず、人物と場所とを交差させて、雲井雁と小野とを結んだ能作が試みられたのなら、この組み合わせに必然を感じさせる仕掛けが隠されているはずである。それを、通説は、雲井雁の落葉宮に対する嫉妬と解説した。亡霊は、死後の長い時間を、恋敵の旧居で過ごすことになる。それほどに強い感情を、落葉宮とその旧居に向けて、雲井雁が抱いていたのであろうか。

このさい、本説『源氏物語』との整合は問題にすまい。これが本説を超える創作の眼目だ、といえはそれまでだからである。しかし、そういう雲井雁の嫉妬を主題とする作者のねらいが、詞章の上にじゅうぶん実現されているか否かは、子細に検証されなければならない。ところが、詞章のどこにもそれらしい表現が見当たらないばかりか、当の雲井雁の名さえ、織り込まれたのは、前掲部分一か所にとどまる。「落葉」の語が七例を数えるのに比べて、いささか均衡を失っていないか。一對七の比率は、むしろ七の落葉宮をシテとみなしたとき、はじめて無理のない説明ができる。もともと、七たび恋敵の名を口ばしするのは、それだけ強い嫉妬のあらわれと、詞章を抜きに空想する立場もあろうが、七か所の前後の文脈に照らせば、成り立つことではない。

シテは「夕霧の、まよひ」を晴らしてもらいたいといい、ワキは「扱はいにしへの霧（宝生流寛政版等「夕霧」）にまよひの心を残し」と受ける。これは、シテが雲井雁なら、夕霧への思いゆえに、その障害となる恋敵に怨みをなし、冥界に迷うというぐあいに、感情の屈折をたどるには言葉を補う必要が生じる。いいかえれば、雲井雁の嫉妬を述べたにしては、かなり舌足らずな表現なのである。その不満も、シテを落葉宮と考えれば、解消する。落葉宮の夕霧ゆえの迷い、これが表現に即応した解釈であり、主題もここに見出すべきであらう。

シテ雲井雁説は、一にシテ自身の名のりを有力な根拠として、これまで行われてきたようである。たしかに、シテの中入り直前にその正体がほめかされるのは、夢幻能の定型を襲うものといえる。しかし、「わが名をいはん」といつて、名のりの姿勢は示すものの、また「我もねになく雲井の、かりがね」と、「我」が「雲井雁」であるかの表現を用いるにせよ、前掲部分を読んで、この段階で名のりが完成したときめつけるのは早計でないか。というのも、「我」や「わが名」は、曲中にくり返し使用され、そのすべてが雲井雁を指すことを、同時に証明しなければならぬからである。

たとえば、第4段の「クセ」の冒頭を引いてみる。

恋のやつことなりはつる、思ひやのべんとはかりに、ゆかりの露をむすびしも、契りの中は身にそまで、もとよりしみにしかたこそ猶しげり行草の名の、なぐさめがたきおばすてにてもろかつら落葉を何にひろひけん、名はむつまじきかざしなれども、かくいひしこと
の葉のわが名におふぞかなしき、……

第4段のシテの「むかしがたり」は、

あら面白や落葉の宮とは、いかやうなる名にて候ぞ委御物語候へ

というワキの要請に応えるかたちで、柏木と女三宮の密通のあらまし、それが落葉宮の宿世に落とした影などを中心構成される。雲井雁には全く触れることなく進行し、彼女がシテであるなら、その嫉妬と直接関連しない密通事件が、どうしてこう詳細に（柏木と女三宮の後朝の贈答まで）紹介されるのか、不自然の感を禁じえない。しかし、落葉宮にとっては、名まえどおりのわびしい境涯を決定するできごとであって、その一夜に無関心でいられたわけがない。「むかしがたり」の内容とその語り手との必然的な結び付きという点からも、シテは落葉宮として読むほうが穏当である。

それはともかく、右の一節は、ワキが興味を示した落葉宮の名まえの由来を教える部分であり、女三宮に劣る二宮との結婚は落葉を拾うようなものだとの柏木の独詠を踏まえている。その落葉の名が「わが名におふ」（「負ふ」か。「合ふ」とする本もある）とシテがいうのは、シテがその名を持った落葉宮であるからではないか。これを雲井雁説から説明しようとする、

(2)、又この「我名」といへるは。雲井の雁の亡霊が。暫く落葉の宮の身の上になりて。昔語りする語気と知るべし。

とでもいうほかないであろう。「身の上」になるというのは、自らの意志でそうなったのか、あるいは落葉宮に乗り移られたのか、いずれにせよ突如そうなる理由がないし、「暫く」がどこからどこまでなのか、詞章に転換のサインを読みとることは困難である。

アの『評釈』以後、雲井雁説を採る諸家は、この難問をどう克服してきたのであろうか。私には、アをさかのぼること百年、文化九年（一八一二）に本曲を含む外篇の成った『謡言粗志』（佐久間寛台著）の、

考ルニ此謡ハ落葉ノ宮ノ亡魂カリニ顯ハレテ僧ト問答ノ事ヲ作ルト見ヘタリ子細ハカク云シ言ノ葉ノ我名ニアフゾ悲シキト云ルハ諸カツラ落葉ヲ何ニ拾ヒケント云歌ニアタリテ我名ニアフト云モノ必落葉宮ナルヘシ（都立中央図書館蔵、自筆本）

という見解のほう、よほど抵抗なく受け入れられる。

四

『謡言粗志』では、右に引いた分のほかに、シテを落葉宮とみなす理由を三点挙げてゐる。まず、「クセ」の後半、

シテ あけぐれの空に浮身はきえなむ、^地夢なりけりと見てもせめて、なぐさむべくといふこゑを、き、すて出しましたましひは我をはなれてさながらに、人にとまれる心ちして、うつし心も涙のみ、其身をせめてたえし人に、我身はかなきちぎりこそき、しにまさるつらさなれ

には、

「我をはなれて」の「我」……A

「人にとまれる」の「人」……B

「其身をせめてたえし人」の「人」……C

「我身はかなき」の「我」……D

の四か所に「我」と「人」が用いられている。「我」はシテ自身と考えるのが妥当。その「我」から見て、B・Cの「人」はそれぞれ誰なのか。『謡言粗志』は、次のように人名を当てている。

此意ハ衛門督女三宮ニ深ク心ヲカクルヨリ魂モ離散シテ宮（B）ニモトマルカト思フ心也（「聞すて出し」云々の注）

其身ヲ責テ絶シ人（C）トハ柏木ノ女三ノ宮ヲ恋ワビテ失給ヘルヲ云也我身ハカナキ契リ（D）トハ落葉宮ノ詞也カ、ル外心アル人ニ契レルハ其時ニ消果シニモ増リテツラシト也（「其身を責て」云々の注）

此宮ハ柏木ノ衛門ノ督ノ北ノ方ナレハ此人女三ノ宮ニ心ヲツクシテ恋死シタルヲ落葉ノ宮ノ恨テ云ル詞ト聞ヘタリ（前掲「我名にあふ」云々の注の続き）

A・Bを含む前半部は、『源氏物語』若菜下に、

あけぐれの空にうき身は消えななん夢なりけりと見てもやむべく（女三宮）

とはかなげにのたまふ声の、若くをかしげなるを、聞きさすやうにて出でぬる魂は、まことに身を離れてとまりぬる心地す。

（日本古典文学全集本による）

とあるのを切り取り、はめこんだもので、本説においては、密通の翌朝、女三宮のもとをあわただしく去った柏木は、その身体から魂があくがれ出て、女三宮のそばにとどまるような気持ちがあった、と読むのが正しい。その文脈理解は、これを引用した『陀羅尼落葉』にもそのまま適用でき、『謡言粗志』のみならず、アの『評釈』も、

(3)、魂は女三宮の処に残りをる心地してなり。

といい、Bを女三宮とすることで対立はない。

一方、Aの「我をはなれて」については、これが『源氏物語』の「身を離れて」に相当するので、本説どおり柏木とみる向きもあろう。『謡言粗志』も『評釈』も、ともにこの点には触れないが、ただ、後者がDの「我身」を「柏木をさす」としたのは、二つの「我」が同一人物であるとの前提のもとに、本説というよりどころのあるAから、それのないDを類推したのではないかと思われる。Dを柏木と考えた結果、その「ちぎり」の相手であるCは女三宮とみなすほかなく、「其身をせめてたえし」の解釈を、次のごとくに案出した。

(4) 柏木に逢ひしは唯我罪にて。柏木を恨むべき理りは更に無しと。自身の悪しかりし事のみ責めて。其後は逢瀬を断ら^{つゝ}たる女三宮に對してなり。

「我」を柏木、「人」を女三宮として、この組み合わせでAとDの流れを解説しようという試みは、その限りでは筋が通るように見える。しかし、仮にこの読みが的を射たものであったとして、同じ「クセ」のはじめには「暫く落葉の宮の身の上になり」、ここでまた「柏木の心になりて云」うとは、いかにも不自然である。シテが自らを語らず、他人の心情に寄り添うことばかりに熱心なこと、その他人が、途中で別人に替わること、恋敵であったり、(異母兄ではあるが物語の展開上)直接関係しない人物であつたりすること。これらの説明に苦しむより、『謡言粗志』の所説に耳を傾けるほうが賢明であらう。

「其身をせめてたえし人」という表現から、大方の『源氏物語』読者は、密通の発覚と光源氏の視線を恐れ、懊惱のはてに自滅した柏木を想像するはずである。『評釈』の著者でさえ、「我」を読みちがえなければ、この直感に異議をさしはさむことはないと思う。そして二つの「我」は同一人物であるべきだが、「人」はBとCで異なっているかまわぬ。Bが女三宮だからといって、Cまで彼女である必要はないのである。「我」をシテ落葉宮、Bが女三宮、Cは柏木として、この組み合わせで読みほめてみると、——女三宮が「あけぐれの」の歌を詠む声を、柏木は聞き捨てるようにその場を去ったが、かといってそれで私(落葉宮)のもとに落ち着くのではなく、彼の魂は浮遊して女三

宮を訪れ、そこにとどまって、ついに柏木は恋に身を滅ぼしてしまった、そんな彼に、私（落葉宮）ははかない契りを交わし、つらい思いを味わった——となり、シテが雲井雁である場合の、付会に付会を連ねた重苦しきも霧消して、しかも『源氏物語』本文に対応した明快な表現として、詞章中に位置づけることができる。いよいよ、シテ＝落葉宮説の優位は動かない。

五

『謡言粗志』がシテを落葉宮とする理由は、右の二点のほか、次のようなものがある。

又思ヒ出タリ此所ニテ何某ノ律師貴キ御声ヲアゲテ陀羅尼ヨミタリシ事今ノヤウニ思ヒ出ラル、ソヤト云モ小野ニテ一条ノ御息所ノ物怪ヲ祈リシ時此宮モ一所ニマシマセハ也此時雲居ノ雁小野ニ至リ給フ事ナシ

〈陀羅尼落葉〉の曲名の一部をなし、後場の序ノ舞を囃すように唱えられる陀羅尼は、指摘のとおり、『源氏物語』夕霧巻の何某律師の加持にもとづく。読経の聲が流れるなか、落葉宮は、母御息所の病氣見舞いを口実に訪れた夕霧と、小野の山荘で応対し、歌を詠み交わした。「夕霧の、まよひ」（落葉宮の夕霧への思いからくる迷い）の発端といつてよい。このとき同席していない雲井雁が陀羅尼のことを思い出すのはおかしい、シテが落葉宮であるからこそ、鮮明に記憶され、回想されるのだ、というのが『謡言粗志』の言い分である。陀羅尼と小野の山荘のいずれもが落葉宮に縁が深く、執着しようにも、雲井雁には知らない世界の話であった。

結句ニ綿ヲカサリシ梢ノ紅葉ハ木陰ノ落葉ト朽ニケリト留タルモ落葉ノ宮ノ終ヲ云モノナルヘシ

風に舞う落葉、石にそそぐ飛泉、不断の読経、鳴き交わす虫や鹿、ほとばしる滝の水。たんに留めの一句に「落葉」の名が織り込まれたからでなく、秋枯れの野に交響するこれらの音声は、ものがなしい落葉宮の心象に通い、さらに

は、

風いと心細う更けゆく夜のけしき、虫の音も、鹿のなく音も、滝の音も、ひとつに乱れて艶なるほどなれば、（夕霧巻）

と、あの夜、夕霧を促して恋情を訴えさせたのも、風の運ぶこれらの音であつて、落葉宮にとつては、甘美な思い出とその後の苦悩が入り混じる、つまりは「夕霧の、まよひ」を象徴する音の表現といえる。雲井雁には、これも無縁の演出となる。

以上四点の理由を挙げて、『謡言粗志』は、

然レハ此仕手ノ亡靈ハ必落葉ノ宮タル事顯然タリ

と述べ、ここにシテ『落葉宮説』は確立したかに見えた。しかし、これだけの正確な理解を示しながら、なお雲井雁説（『謡言粗志』以前に著作の形でこれを提唱したものを知らない。寛台自身が、その可能性を探索したものと思われる）を捨て切れなかつたのは、やはり中入り前の、シテの名のりめいた表現に幻惑されたく、右に続けて、次のようにあいまいな言い回しで、論を結んでいる。

然ルニ此論義ノ末ニ至テ此上ハ我名ヲ云ンタ霧ノ迷ヒヲ晴シオハシマセト我モ音ヲ鳴雲居ノ雁カネ寒ミ吹風ノサソフトハカリ失ニケリト云ルハ正シクタ霧ノ大将ノ北ノ方雲居ノ雁ヲ云ト見ヘタリタ霧ノ大将ハ落葉ノ宮ニ密通ノ事ハアレ共恋死シタル人ニアラサレハ其身ヲ責テ絶シ人トハ云カタカルヘシサレハ此謡ノ主意トスル仕手ノ亡靈兩人アルヤウニ聞ヘタリ

他の雲井雁説は根拠をここに見出し、逆に落葉宮説はこの一節ゆえに、不安がぬぐえないのである。『謡言粗志』でも、雲井雁の名のりを読みとり、ところが、それでいて兩人あるようだというのは、一曲をおおう落葉宮の影を払いがたいからであり、とくに「其身をせめてたえし人」は柏木以外にないとの確信が、その人に「はかなきちぎり」を交わした「我身」、すなわちシテを落葉宮（雲井雁なら、「人」は夕霧となり、彼はそういう死にかたをしていない）と考えさせている。

「顯然タリ」から「兩人アルヤウ」へと、『謡言粗志』の主張は、「わが名をいはん」以下を視野に収めることで、

やや後退したようである。しかし、シテが「兩人アル」というのも、その使い分けが整然と追跡できるわけでもなく、納得しがたい。雲井雁か落葉宮か、いずれか一人に決すべきであろう。

此論議ハ落葉ノ宮ノ靈魂カリニアラハレテ僧ト問答ノ事ヲ作レリサレハ夕霧ノ大将ハ女三ノ宮ニ執着シテ迷ヒ給フ恋念ヲモ申テ晴サルヘシ我モ其事ヲ思テ落涙スルト云事ヲ我モネニタク雲井ノ雁トハ云ナルヘシ今此ニ雲井ノ雁ヲ引出ス事イハレアリ抑雲井ノ雁トハ頭、中将ノ御息女ニテ夕霧ノ大将ノ北ノ方也（以下、雲井雁の名の由来を説く）

ここに引いたのは、金沢市立図書館蔵『謡言粗志』の該当部分である。寛台自筆の本を加賀藩校書館で清書したといわれるこの本は、誰の判断かは不明であるが、これまで紹介してきた落葉宮説の四つの根拠、並びに一つの不安材料に関する記述をすべて割愛し、右の記述と入れ替えている。冒頭の一文のみは都立本を踏まえ、ただし「此謡」とあるのを「此論議」と改めたのは、全体はもちろん、中入り前のこの「論議」からも、落葉宮説が成り立つことを強調する意図がはたらいてのことなのか、たんなる言い換えなのかはわからない。後続の文も難解である。女三宮に執着して迷ったのは、いうまでもなく柏木である。その「恋念」を、夕霧が申って晴らすの謂いか、それとも「夕霧の、まよひ」を夕霧自身の迷いととり、それをワキ僧に申ってもらい、晴らしてもらうの意か、判然としない。このように論旨にいまひとつ明瞭さを欠くが、しかし、落葉宮説はゆるぎなく打ち出されており（都立本の記述の割愛は、その否定ではなく、是認のあらわれか）、とりわけ注目されるのは、「雲井の、かり」の語の処理である。

六

シテ＝雲井雁説は、くり返しいうとおり、中入り前の名のりめいた文言を、名のりと信じて主張されたのであった。ところが、右に見たように、詞章の各部分は、シテを落葉宮としないかぎり、容易に読み解けなかった。落葉宮説にとっても、残された唯一の課題は、この点にある。はたしてシテは、「わが名をいはん」との予告を、ここでただちに

実行したのであろうか。「我もねになく雲井の、かりがねさむみ」がその答え、正体明かしに相当するのか。シテ落葉宮説からは、名のりが名のりになっていないこと、名のると見せていいさした理由、が説明できればよい。説明にあたっては、金沢本『謡言粗志』に説くところが参考になる。

金沢本は、少なくともその文面上、落葉宮説を疑っていない。雲井雁説が成り立たないことを前提に、「今此所ニ雲井ノ雁ヲ引出ス」わけを探り、雲井雁が夕霧の北の方であったという周知の事実を呈示している。これだけでは何も解決しないが、金沢本は、物語中での彼女の独り言からそう呼びならわされたという、その独り言を借用した、

霧深キ雲居ノ雁モ我コトヤハレセヌ物ノ悲シカルラン

なる「古歌」を引用しており、そのような歌語の利用は、能の作詞法の常套でもあったことが想起される。そのことは、雲井雁説をとるアにおいても、

(5)、夕霧大将の名をほめかしたるにはあれど。文の表は。迷を晴らしの枕詞として用ひたり。（「我名をいはん夕霧の」の注）

などと、縁ある言葉の枕詞・序詞的用法が指摘されている。もっとも、「夕霧の、まよひ」の場合は、「夕霧」が「まよひ」を導く確な形象であると同時に、落葉宮の夕霧ゆえの迷いという主題をになうキイ・ワードであって、表面的な文飾とのみ受け取るのは誤りであろう。それよりも、アとしては、この視点を「雲井の、かり」にも向けるべきであった。

(6)、雲井の雁とほのかに名乗りたるなり。

でとどめず、(5)にならない、「文の表は。へ夕霧」及び「へねになく」の縁語として用ひたり」と理解すれば、シテ雲井雁説を立てることもなかったのである。金沢本が、雲井雁は夕霧の北の方だという初步的な知識を披瀝したのも、そのあとの、歌語「雲井雁」の例示とあわせ読むと、いちがいに無意味なことでもなかった。縁語の連鎖を分解すると、――夕霧様ゆえの、夕方の霧のような迷いを晴らしてください、（「夕霧といえは、その北の方は雲井雁とか申された」という連

想で雲のかなたに鳴く雁と同じく、私も声をあげて、迷いのために泣いています、——ということになり、残されたこの部分も、シテⅡ落葉宮でじゅうぶん読み解けるのである。

「わが名をいはん」といっておきながら、それでは正体を明かさなかったことになる、という反論があるかもしれない。しかし、シテの正体が落葉宮の亡霊であることは、小野の山荘という土地柄、また昔語りの内容など、まさにそれを観客に思い当てさせるためのさまざまな工夫によって、すでに名のる以前に了解されており、必ずしも「我は落葉宮なり」と名のることが効果的な進行とはかぎらない。作者としては、名のりきらせないことで、すなわち観客の想像力の参加を持って、あるいは後場末句の「木かげの落葉と朽にけり」と照応させるかたちで、シテの名のりを完成させる計算を隠しているのではないか。

こうして、落葉宮説をとる都立本『謡言粗志』に、その断定をためらわせ、「兩人」説を並記させた名のりの問題も、むしろシテが落葉宮であるからこそ、こういう形になったと考えられ、雲井雁説にばかり立脚の基盤を提供するものでないことが明らかになった。このうえは、都立本の挙げる四つの根拠がすべてシテⅡ落葉宮をさすことでもあり、雲井雁説に替え、落葉宮説を復活させるべきであろう。

最後に〈陀羅尼落葉〉という曲名について付言しておきたい。落葉宮をシテとするこの曲の名が〈落葉〉とされず、〈陀羅尼〉が冠されたのは、先行して存在していた類曲〈落葉〉（能本・作者付・演能記録の早いものを比較すると、そのいずれによっても、〈落葉〉が十六世紀のはじめ、〈陀羅尼落葉〉は資料に乏しいがその後半、を上限とし、約半世紀の隔たりがある）との混同を避ける処置であったことが想像される。同じことは、シテⅡ雲井雁説からも、たとえば、

ケ、落葉の宮に対する雲井雁の嫉妬心が、死後もなお消えぬことを描く。落葉の宮を主人公とする同名異曲の〈落葉〉と区別するため、文中に陀羅尼を読む場面があるところから〈陀羅尼落葉〉と名付けたものらしい。

などと指摘されているが、シテが雲井雁であり、かつ〈落葉〉と区別する意志があるなら、まぎらわしい「落葉」を

用いず、(落葉宮をシテとする〈落葉〉がそうであつたように)シテの名そのままに〈雲井雁〉を曲名とするのが自然ではないか。この点も、雲井雁説には負の傍証となる。